飛ばされたキングダムの世界で

陳慶之

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

開闢大学附属高等学校。　早慶上智に並ぶ名門大学の附属高校である。

この高校の修学旅行（見学旅行）は、中国を一週間かけて、旅行するものであった。

ハルビン、北京、洛陽を経て４日目に、彼等は西安に入った。

そして不幸なことに、始皇帝陵を見学していた彼等を、大地震が襲う。

陝西大地震である。

このために、主人公の足立政一と太田秀信は死んでしまい、神様により転生（憑依）を許されることになり、２人はキングダムの世界に飛ばされる。

そして、２人はそこで、政と信として、中華統一を目指すこととなるが……果

たしてどうなるのだろうか……。

戦略上の問題で、ご都合主義があるかも知れませんので、苦手な方がそれを見つけた際はブラウザバック推奨。　バックしないで、ご都合主義じゃねと言い出す輩は白袍隊に討たせます（笑）

目次

序　始皇帝の最期 ―――― 1
第一話　俺達は死んだのか？ ―――― 6
第二話　歴史は偶然で変わってしまう ―――― 16
第三話　⊠政として起つこと ―――― 22
第四話　秘密を知りながら ―――― 30
第五話　優しそうな親父とビチグソ母王妃 ―――― 39
第六話　魏公子の謀反 ―――― 46
第七話　王騎と対面 ―――― 54
第八話　来ちゃった魏無忌さん ―――― 61

序　始皇帝の最期

（ｓｉｄｅ　始皇帝）

「陛下！　これは一体どういうことですかっ！」
「煩いぞ李斯。　これがこの中華における最善なのだ。」
「我らに史に悪名を刻めと陛下はおっしゃっておられる。」
「趙高っ！」
　李斯と趙高……2人の臣下が俺の寝所で揉めている。
「李信を退け、王賁は隠棲し、王翦や蒙武もこの世に亡き今。
　何故、陛下は胡亥様に後を継がせ、太子の扶蘇様と蒙恬殿の誅殺をお命じになるのですか！
　蒙恬様が死んでは、反乱が起きし時、我々の内にそれを止めうる将はおりませぬぞ！」
「朕が最後にやり残したこと、それが秦を滅ぼすことだからだ。」
「なっ！
　陛下っ……正気ですか！」

「正気だ。　　李斯。
何故、朕が中華全土に行幸したと思っている。
今ある状態が、秦による侵略ではないと、説くためだったのだ。
だが、もはやそれさえも叶うまい。」
俺は、本物の☒政に成り代わり中華を統一した後、中華の統一国家の維持を考えた。
しかし、結果は散々なものであった。
李斯がキングダムで語っていた法家と儒家の戦争は、法による人間の自由意志を雁字搦めに縛り付けることとなり、キングダムにおける呂不韋の政治と同じく、人への諦めを法に反映する結果を生んだ。
そして厳しくなりすぎた法は秦による征服・支配をことさら印象づける結果となり、☒政が考えた中華統一構想はすべからく破綻した。
そこで、北宋における契丹のように外敵を外に作ることで国内を統制するように仕向け、蒙恬に外征を命じたが、李牧による壊滅的な打撃から立ち直っていない匈奴では相手にならなかった。

やはり、漢や唐、明、清のように
それまでの国が壊れたところ、中華全土が国を失うという同じ舞台に立ったところに

1から新たな超大国を作り出すしか中華統一国家を作り出す道はないのだろうか……。

⊠政……やはりお前を死なせてしまったことがつくづく悔やまれてはならない。

お前が抱いていたであろうこれからの中華の舵取りを、俺は俺の思い描ける範疇で成し遂げようとしたが、やはり俺はお前ではなかった。

到底お前が描いたであろう中華にはならなかったのではないだろうか

中華はこれから劉邦、項羽、張良や韓信の時代を迎えることになるのだろう

そして、李斯、趙高、蒙恬、蒙毅、扶蘇……。

章邯らもだが、秦の次の世代も担っていく彼らのことを思うとやるせないが、それもまた中華の望む歴史であるのだろう。

俺が秦王として中華統一を果たしたように……。

「陛下っ！　陛下！」

そして俺は始皇帝としての生涯を終えた。

目が覚めるとそこは病院だった。
「帰って……きたのか」
「政一っ！」
枕元には、俺と共にかつて、飛信隊・信……新六大将軍・李信として中華を股にかけた、同級生の太田秀信がいた。
「ああ。　俺は、帰ってきたぞ」
「うん！　うんっ」
「人に話しても、誰も信じないだろうな……。」
「だけど、僕は知っているよ。」
「それだけで、充分だけどな。」
「そうだね。」
「ははっ。」
これは俺達２人だけの秘密だ。

キングダムの世界に転生し、原作とも大幅に異なるハードな苦難をもくぐり抜け、李牧や項燕、呂不韋や魏無忌などの数多の敵を倒して中華統一を果たした、あの日々のことは。

この先も、俺とこいつの、心の中の記憶としてのみ残り続けるのだろう。

第一話　俺達は死んだのか？

（ｓｉｄｅ足立政一）

「よいか　この西安は京都なんざ比にならないくらいの古都だ。

よく学ぶように。」

大嶋教諭が煩い声で叫んでいる。

大島教諭は世界史の担任だ。

毎回のように厳しいテストとクソ専門的な課題を出してくる。

大学の史学科生に出してくるような問題ばかりだ。

俺の志望は法学部なので全く興味は無い。

だが、法学部は早○田、○應、中○、そしてウチらの４つの私学大が司法試験に強いなんて言われているくらいなんである程度の成績が必要だから、仕方なくやっているわけだが。

ちなみに、この大島教諭は自身の後輩、つまり、開闢大学文学部史学科生を増やすことに教師人生賭けてるような嫌な奴だ。

ヤ○ーの知恵袋になんて書き込もうものなら、

「お前の成績は1だ」
がベストアンサーに選ばれており。
そのベストアンサーの回答者のＩＤはＢｉｇ－ｉｓｌａｎｄだったとかいう噂がまことしやかに囁かれている。
ってこれどっかの高校にも似たような噂があったな。
確かそっちは化学教師の……。
まあ、どうでもいい。
これ以上言うとそのどっかの高校が特定されちまう。
分かる奴には分かるだろう。
「おい、秀信、いつまで見ている気だ?」
横にいるのは太田秀信。　まさにその史学科志望という変わった奴だ。
附属という学校に似合わない程ウブな奴で、俗に言うラブコメの主人公体質な癖して好きな漫画はキングダム。
本人は運動神経は良く、顔も良いのにそれだけのせいで彼女いない歴＝年齢という可哀想な奴である。
「あ、うん。」
彼が見とれているのは兵馬俑。

彼曰く、始皇帝は千年に一人の英雄王らしい。

ま、たかだか黄河流域にしか国家と呼べるような代物が存在しなかった中国大陸に、中国大陸全土を網羅した巨大な国家を建設したくらいだから、その認識は間違いない。

統一国家という概念、皇帝という概念を生み出しただけでも、その凄さは既に語るまでもない。

ただ、晩年の幾つもの汚点を残し、後世には「秦始漢武」というのが暴君の代名詞となってしまったが。

「次は漢の時代の史跡らしいから早くいくぞ」

「え～？　僕、劉邦嫌いなんだけどなぁ

親父臭いし、何もしてないくせに天下は取るし、何もしてないくせに粛清バンバンするし」

「お前の好きな三国志の劉備の実態とてそんな感じだろ」

「う、うう……劉備で天下を取るのは浪漫があるじゃないか」

「知るか　コー○ーのゲームのやり過ぎだ。」

「そんな……!!」

「さて、行くぞ……?!」

その瞬間、大地が揺れた。
かつて経験したことの無いくらい烈しい揺れだ。
壁が崩れ、屋根が落ちてくる。
これが中国クオリティ……!!
「あっ!　政一ぃっ!」
「うわ、最悪。まさかこんな人生の終わり方をするなんてな。」
何故か叫び声をあげて抗うことが出来なかった。
そして、妙なことにこんな状況で冷静な自分にはつくづく驚かされる。

次の瞬間、俺の意識は無になった。

ーーーーーーーーー

気づくと、俺は奇妙なところにいた。
隣にはなぜか秀信のやつがいる。
「よ、よかった!!」
秀信は安心してくれたようた。
「だが、　ここは何だ。」
すると、脳内に妙な声が響く。
「そなたらには申し訳ないことをしたのう」
なんだ、これ？　まさか神様転生とかいう奴か？
俺は死んだのか？
やはり俺の頭は冷静なままだった。死ってこんな冷静でいられるものなのだろうか？
「流石、頭の良いのは話が早くて良いのう
いかにも、これは神様転生の機会をそなたらに与えようという……」
「ふざけないで、早く元の世界に返せよっ！」
秀信は脇でキレていた。

「落ち着きがないのう。　好きな世界に転生させてやると言うておるのに
まあ、転生先での目標を達成できたら、元の世界に戻してやるがな。」
……おもしれぇ
「じゃあ、Ｔｏ　Ｌ○ＶＥるで!」
どうせ転生すんなら、結城リトに転生してウハウハしてやる
あいつの生来のバカさを俺の学力で補完したら完璧じゃないか!
「やれんこともないが……最高難度じゃな。
ソードアート○ンラインとか、Ｔｏ　ＬＯ○Ｅるの世界に転生したがる輩も後を絶たないが、みんな失敗しておる。
あいにく、ウチは転生特典無しじゃしな。」
チッ。　転生特典無しかよ
「ちなみに、Ｔｏ　○ＯＶＥるの目標って?」
「結城リトの親友・猿山で２０人以上に跨がるハーレム形成
但し２０人の中にララ、モモ、古手川唯、西連寺春菜を含まない場合は無効。」
猿顔でそんなハーレムを形成するなんて難易度高過ぎだろ
「ソード○ートオンラインは?」
「アインクラッド第１００層までパーティーを率いて到達

但し名前だけでも登場した原作キャラクターを含めたパーティーは無効。
当然、死んだ時点でチャレンジ失敗じゃ。」
無理ゲー
こうなれば敢えてレトロな所を……。
「うる○やつら」
「また随分古いところを突いてきたの。
面堂終太郎でハーレム形成
ハーレムの構成要件としてラム、しのぶ、弁天、おユキ、クラマ、竜之介、ラン、さくら、カルラ、飛鳥を全て含まない場合はこれを認めない。」
面堂自体はモテるキャラに入るが、その面子は厳しい
恋人がいるキャラ多いし。
だが、大分楽にはなってきた。
やはり、レトロな感じが良いようだ。
「銀○英雄伝説」
「トリューニヒトに転生して内政を行い、銀河帝国を戦略と謀略で弱体化させきったところで攻め入り、ラインハルトをドーソンに率いさせた艦隊で戦死させる。
但し、ヤン、ビュコック、メルカッツを遠征軍に編成してはならない。」

戦略で最強キャラのラインハルトに勝つ自信は俺には無い。
レトロでもダメか

その後もたくさんある中で色々尋ねていったが、めぼしいものはなかった。
「おい、爺！　ろくなもんないぞ！」
そして何故か原作崩壊案件とハーレム構成案件ばかりだ。
「そうだよ！　原作崩壊案件とハーレム形成案件ばかりじゃないか！
原作に沿ったのは無いのか！」
これには秀信も怒ったみたいだ。
てか、話を聞いた感じ、これは転生ではなく、憑依な気がする。
「あるよ」
「「早く言えやっ！」」
「ほらこれ」
示されたのは「キングダム」と「３×３Ｅ○ＥＳ」だった。

「キングダムしか知らないな。」
「キングダムで決まりだよ。
つか、僕達、西安で死んだんだし、丁度いい。」
つか秀信の奴、結構嬉嬉としてる。
「で、目標はなんだ。」
「秦の、⊠政による中華統一。
サポートするも、⊠政になりかわるも良しじゃ。
これだけだが、その分、原作よりも展開がハードに出来ておるかも知れぬぞ」
憑依じゃないやつもあるんだな。
「だがまあ、ハーレム形成よりは楽です」
「本当に後悔はないな。」
「「はい！」」
「そうか　　では、行って参るがよい」
「「はい！」」

その瞬間、まばゆい光が俺達を包んだ。
原作よりもハード……か。

面白いな。

そして、俺達は、いや、俺は

「……え?」

崖の上に俺はいた。

崖の下では誰かが弓を持った兵士の騎馬隊に追いかけられていた。

そして少年が馬車を御して、美人が追手と応酬している。

「……。」

どうやら、あれが⊠政で、俺は本当にキングダムの世界に転生を果たしたようだという状況を悟らせられた。

第二話　歴史は偶然で変わってしまう

（ｓｉｄｅ　足立政一）

とにかく、あれは⊠政と紫夏で間違いない。

とりあえず、助けるしか道はないだろう。

だが、あいにく俺は武器を持っていない……終わった。

折角のチャンス。　始皇帝⊠政に近づくチャンスなのに。

どうしようか。

それに、まだ馬車がこっちにくるまで時間があるとはいえ、こっちは崖。　飛び降りたらおそらくただでは済まないだろう。

そして、何よりも致命的なのは……。

俺の身体が９才くらいの身体ということだ。

⊠政に成り代わるもよしってこういうことかよ。

死ね

だが、嘆いていても目の前の現実は何も変わらない。
やはり、助けるのが最善の道という状況に変わりはないはず。

それにしても、⊠政……遠目で見る限り、誰かに似ているな……誰だっけ。
まあいいやそれどころじゃない。

馬車を眺めながら、俺は、飛び降りるタイミングを見計らうことにした。

馬車を眺めてタイミングを窺っていると。
騎兵が一人、崖と馬車の間を並走しはじめた。
騎兵と紫夏が激しく渡り合っている。

このままの状態で、俺の真下まで来てくれたなら、兵士の頭を目がけて飛び降り、体重で敵の兵士の首を折って、その余勢を駆って馬車に降りられる……。

来たっ！

その馬車と騎馬は見事に俺の真下まで来てくれた。

「よし！　今だ！」

バッ　と飛び降りた。

「?!」

兵士よりも先に、紫夏が飛び降りてくる俺に気づいたようだ。

紫夏はその軌道を察知し、スッっと後退した。

兵士が前につんのめったところで

グキッ

俺は兵士の首元に着地した。

尻の辺りが滅茶苦茶痛かった。

だが、兵士はきちんと首を前に大きく曲げ、次いで胴体が大きく馬車に倒れた。

紫夏は俺の顔を見るや、一瞬驚いた表情をしたが、すぐに真顔に戻り、

やがて、クイッと首で合図してきたので、兵士を道に投げ捨ててきた。
「お前は?」
☒政が馬を御しながらも、俺に尋ねてくる。
「影武者です。」
影武者なんて年格好が同じなら、全く問題ないだろう。
まあ、秦の一公子なんて一々向こうが覚えている訳がない。
「そうか。」
☒政は集中しているので、それ以上は訪ねてこなかった。
紫夏も紫夏で、弓で応戦するので精一杯だったし、俺の背格好を見ただけで察していたのだろうか、詮索はしてこなかった。
「というわけで、私も貴方の背中を守りますよ」
☒政の背中を守るべく、弓で紫夏を援護することにしたが
お、重い……。
弓の弦が異常に強い、強弓だった。

ヒョロヒョロとした矢が、追いつきつつあった兵士に向かって飛んでいく。
「けっ。　こんなヒョロ矢が。　　うげっ!」

ヒョロ矢を剣で弾き飛ばした隙に紫夏の剣の餌食となる。
だが。
「今だっ！」
もう一方から来ていた兵士の矢が
「危ないっ！」
「ぐっ！」
俺が叫ぶも間に合わず、紫夏の胸に鋭く突き刺さってしまった。
紫夏は激しく血を吐き出して、膝をついてしまう。
「紫夏ぁ！」
☒政は馬を御しながらも、叫ぶ。
「前を向いて、走れっ！」
紫夏はそう叫んで、再び乗り込んでこようとしてきた兵士を
自らもろとも右に広がる切りだった崖の下に兵士を追い落としてしまった。
「政様……どうか偉大な王におなり下さい」
それが紫夏の最期のことばだった。
「紫夏ぁあああっ！」
次の瞬間。

馬がモヒヒンと嘶き、足を絡めて、大きく前につんのめってしまった。
「あっ！」
そして。
「!!」
馬車は大きく右後ろに逸れ、先程、紫夏が飛び込んでいった崖の方へ俺達もろとも転げ落ちていった。
全く、ついていない。

第三話　☒政として起つこと

（ｓｉｄｅ　足立政一）

目覚めると、俺のすぐ下には息絶え絶えな☒政、そして、目の前には大きな湖が広がっていた。

☒政が下敷きになってしまった為に、俺に身体のダメージはあまりいっていなかったらしい。

倦怠感以外は、全くといって良いほど痛みはなかった。

☒政……将来の始皇帝を下敷きにしてしまったなんて、俺は相当やらかしてしまったようだ。

上を見上げると、辺りは森になっていたようで、馬車が大木に引っかかっているのが頭上に見えた。

そこから俺と☒政は投げ出され、身体を強く打った様だった。

「おい、☒政、☒政っ！」

☒政は、あの時の奴にとてもよく似ていることに気づいた。

見覚えがあったのはこの事か……。

年格好、背丈、顔も何もかも似ていた。
☒政の髪が長いくらいしか差は無い。
息は辛うじて、あるようだ。　心臓の動悸もある。
奴のようには、死なないでほしい。

「……かはっ！」
☒政は大きく血を吐いた。
「ご無事ですか！　ただ今水を」
着ていた服を……あらためて見るときちんと中国服だった。
「待ってくれ」
☒政が俺を呼び止めた。
まさか、死から逃れられないと悟って遺言をという訳か？
止めてくれ　☒政の代わり……興味があるがハード過ぎる。

それに、影武者が生き残って、本人が死んだなんてなんとも情けない話だ。
「は。」
「趙の兵士に回収されたくはない。
すぐにここを離れ、秦に向かう……ぞ
俺を背負ってはくれぬか」
☒政は全身を強く打った跡があるし、顔色もかなり悪い。
それに、☒政を下敷きにしてしまった失態が俺にはある。
「分かりました。」

だが、しばらく行ったところで
パタン！
☒政が後ろに倒れた。
「政様っ！」
☒政の耳からも、血が出ている。
奴の時と全く同じだ。
だから、助からないのが分かる。

「おそらく、俺はもうダメだろう。
その前に、そなたに託したいことがある。」
思った通りかよ
「何言ってるんだお前っ！　お前は王様の子だろう！
⊠政だろう！
お前じゃなきゃ、苦しみをより多く知るお前じゃなきゃ、偉大な王になんか、なれないだろ！」
お前の重責を担う気は無い。　俺は俺だ。
俺はお前を支えるのは構わんが、お前の代わりに王になる気は毛頭ない。
それに、奴に……誠二によく似た⊠政に死なれたら……俺は……。
「そうだな……本当なら俺は生きたい。
だが、もう、悟ってしまったんだ。
俺にはもはや、死に抗う力さえ残されていないことに。
紫夏や、道剣や……多くの人々が俺を守ろうとして死んでいった。
それを思えばこそ、ここまで、連れてきてもらったが、もう、これ以上は保たないだろう」

「止めろ！　聞きたくない！
お前は死なない！　死なれたら困るんだよ！」
誠二に似ているお前には死なれて欲しくない！
「済まぬ。　お前は……俺によく似ている。
父に子がない時は、お前が秦王となれ……よいな……。」
☒政はそう言うや、左を向いて……力尽きた。
「☒政いーーーーーーー!!」
☒政の、誠二によく似た死に顔を見た俺は、絶叫した。

誠二は俺の双子の弟だった。
俺よりも優秀な男で、何をやらせても、俺の１つ上を行った。
両親が俺を叱っても、誠二は俺を庇ってくれた。
俺には出来過ぎた弟だった。

だが、そんな誠二は１０才の時、俺の目の前で、交通事故で亡くなった。

加害者は、麻薬をキメていた屑で、心神喪失を理由に、責任能力無しと判断され、裁判で無罪になった。

しかも、この屑は芸能人の二世で、イケメンミュージシャンとして名が通った碌でなしでもあった。

そのブログには、全く反省していないどころか、誠二を冒涜するような文章まで載っており、それが、俺の今の進路を決めたといっても過言ではない。

そして、何としても、現在も一線で活躍しているソイツに地獄を見せてやりたい。

それが、俺が元の世界に戻りたい理由の1つでもあった。

俺は最期まで誠二の傍にいて、誠二を看取っている。

そして、また、俺は、その誠二によく似た、⊠政を看取った。

誠二も⊠政も、理不尽な暴力によってその幼い命を奪われていた。

殊に⊠政の命を奪ったそれは、時代という理不尽だった。

許せない。　だが、それが戦国の世の当然だ。

理不尽によって弱き者が強き者に翻弄され、虐げられ、いたぶられ、犯される。

理不尽としても、変える力を持たねば、何ら意味を成さない。

憤るだけ、時間の無駄だ。

だから、変えてやる。　この世の理不尽を周く駆逐してやる。

戦国の世を終わらせることで、理不尽な暴力を駆逐する。

それが元いた世界の誠二や、☒政の弔いとなるだろう。

戦国の世を終わらせるには、理不尽な暴力を振るわないことには無理だ。

だが、その先の数百年、いや、数十年の、理不尽のない平和が訪れる為ならば、理不尽な暴力を振るう最低の人間に、俺は堕ちてやろう。

そして、俺は……そうして中華の唯一王・☒政として、この地に、安寧を、秩序を、理不尽のない世界を、築き上げてやる！

やがて、秦国の捜索隊がきた。
「政様っ！　政様っ！」
昌文君と覚しき、オッサンが近づいてきた。
そして、☒政の遺体にかけよろうとするのを
「おい、何をしている??」
止めた。
「ん。　何じゃ貴様は。」
「俺こそが、秦の太子・☒政。
中華の唯一王となる男だ。
……そいつは、俺の影武者だ。」
俺はそう叫んだ。

第四話　秘密を知りながら

「な、何を言い出すか貴様っ！」
昌文君は俺に向かって唾を散らしながら、そう吐いてくる。
「その程度の見分けもつかんのか！　無礼者め！」
ここで退いたら俺の負けだ。
☒政を死なせた責任を取らされて、俺は殺されてしまうだろう。
失敗には、誰かが責任を負わされるのが政治の常であるからだ。
「……っ。」
昌文君は、黙るばかりである。
あまりにこちらが我ながら大胆な発言をしていることに、つい黙らざるを得なかったのであろうか？
だと、良いのだが……。

（ｓｉｄｅ　昌文君）

間違いなく、此奴は政様ではない。
確たる証拠はないが、長年戦場で培ってきた勘が儂にそう言っておる。
確かに、政様と覚しきご遺体とは全く区別もつかないくらいそっくりだ。
だが、今の秦王にある、独特の雰囲気……気品とでも言うのか、それが此奴にはない。

いくら、邯鄲という敵国の都で育ったとはいえだ。

だが、妙だ。
なぜ、此奴はここまで冷静でいられるのだ?!
「どうした?　貴様。
私はいかにも本物の☒政だが、何を躊躇っている?
もし、その死体が本物の☒政とあくまで言い張るなら、貴様の責任は免れないぞ
太子を見殺しにした大罪人の汚名を刻むか、それともこのまま俺を本物の☒政と認

め、咸陽に帰るか。
どちらか選べ」
儂に向かって、此奴は大層なことを言ってきた。
此奴っ……何と白々しいことをぬかしおって！
じゃが、見た感じ政様と同じ１０才くらいのこ奴は、何故こうも堂々としていられるのだ？
あり得ぬ。

でも、もし、此奴が秦王になったら、間違いなく今の王よりも優れた王になるのではないか
此奴のその、一周回って白々しいまでの肝っ玉の太さ、いや、厚顔無恥さが儂の勘にそう知らせている。

「殿、如何致しますか。
このものはどうも変です。　子供らしさが全くありません。
趙の間者ではありませんか？」

いや、それはない。
何故なら、武芸を習った形跡が、その身のこなしからは見て取れないからだ。
……確かに秦王の血は引いていないだろう。
しかし、秦王の血を引く者よりも遥かに王として必要な胆力。
此奴はそれを持っておる。
秦王朝の社稷に対しては罪を犯すことにはなろう。
しかし、もし、此奴が王になるなら、秦は、更なる高みに上る事が出来るのではないか。
儂の心は決まった。
儂は即座に先程の側近の首を切り落とした。
「と、殿!?」
「どうか、無礼をお許し下さい。　政様。」

儂は、此奴に賭けることにした。

（ｓｉｄｅ　足立政一）

「何。　人には誰しも間違いはあるものだ。
気にするな」

どうやら、俺はこの賭けに勝ったようだった。
だが、間違いなく、この昌文君は気づいている。
俺が、⊠政ではないことに。
それを承知で俺を受け入れてくれたのだ。
その理由を確かめる必要がありそうだな。

だが、今はひとまず、昌文君の顔を改めて確かめておこう。

「ところで、そなたの名は何という？」
「昌文君と申します。　政様」
「そうか。　　では、これからよろしく頼む。　昌文君。」
「はっ！」
「では、これから咸陽に向かう。

直ちに支度せよ！」
「「ハハッ!!」」

その夜、俺は昌文君を呼び出した。
「何用でございますか」
「ご託はよい。
昌文君、貴様、俺が⊠政で無いことに気づいているな？」
「……やはり、政様ではなかったか。
お主は何者だ？」
やはり、気づいていたか。
「俺が何者かを答える前に、貴様、何故、俺を⊠政と受け入れた？」
一気に畳み掛ける。

「フッ……大した理由ではないわ。」
「ほう。」
「お主は１０才にしてその胆力を持ち、儂の前でも全く怯まなかった。
そんなお主が秦王になったなら。
そう考えたまでじゃ。」
偽りを言う目ではない。　野望といったものも感じられない。
「そうか。　感謝する。
昌文君。」
「何じゃ。」
「お前は良い選択をした。
俺を信じてくれたお前に、俺の野望について話そうと思う。
そして、何故、⊠政と入れ替わるなどという選択をしたかについてもな。」
決して元の世界に戻りたいとかではない。
「ふむ。」
「俺にはたった１人の弟がいた。
だが、弟はとあるバカに殺された。
そして、俺は思った。

弟を殺したのは時代の理不尽だと。　そして、⊠政も時代の理不尽によって殺されたと。

俺は、弟の時は、ただただその暴力に抗う術を知らず、眺めていることしか出来なかった

だが、⊠政が、目の前で死ぬのを見て、それではいけないと悟ったのだ。

だがら、俺は、こうした時代の理不尽を駆逐するために。

たとえ後世に、悪名を残そうとも、やり遂げることを誓ったのだ!!　昌文君!!」

「はっ？」

「よく聞け！　昌文君。

俺は、あの昭王にさえ成し遂げられなかった、中華統一。

それを必ず成し遂げるつもりだ。

たとえ、どのような茨の道を歩もうとも、必ず。

だから、昌文君！　俺に力を貸せ!!」

「ははっ！　」

昌文君は心底驚いた様子を見せ、次の瞬間、片膝をついた。

（ｓｉｄｅ　　昌文君）

此奴、何という男なのだ。

僅か１０才にして、昭王と同じ、中華統一を語るとは……！

期待を遥かに上回る男のようだ。　　此奴。

良いだろう。

儂は、やはり貴様に全てを賭けようでは無いか。

儂の見立てが間違ってなかったことを、せいぜい証明してもらうぞ。

「この昌文君、⊠政様に身命を賭してお仕え致しまする！」

儂の選択を、これからも誤らせてくれるでないぞ。

小童!!

第五話　優しそうな親父とビチグソ母王妃

（ｓｉｄｅ　足立政一　＝　⊠政　）

そしてついに俺は昌文君に連れられて咸陽に到着した。

「流石は、西帝と謳われた秦王のお膝元だな。」

「そうでありましょう。」

王都・咸陽には、貴族の屋敷と覚しき高楼が高くそびえ立ち、行き交う人々には、西域人の影もチラホラ見える。

呂不韋も西域人らしいから、驚く程のことでもないが、それだけ秦の交通が盛んと言うことだ。

「あ、そうだ昌文君。」

「如何なされた。」

「父王陛下に会われた後、王騎将軍と誼を通じてくれないか」

「……わかり申した。」

「ありがたい。」

王騎将軍と誼を通じる。
この繋がりこそ、俺が秦王になり、親政に向けた権力闘争をする上で強力な手札となり得る筈だからだ。
他に頼れるような名将はいないしな。
これはまだまだ先でも良いかも知れないが、あのクソ爺神が言っていた、史実よりもハードと言うのが気になるので、急ぐことにしたのだ。

「着きましたぞ　王宮に。」
気づけば俺を載せた馬車は王宮に着いていた。
俺は王宮の宮殿の外に立たされた。
そして
「公子政様、ただ今ご到着成されました！」
「と、通せっ！」
若くて、気後れも孕んだ声が聞こえてきた。
☒政の父親……昭王こと昭襄王とごっちゃになるアイツ……確か荘王だったかな。（※荘襄王です）

そいつの声に間違いない。

俺は居並ぶ群臣の中を進む。

能ある鷹は爪を隠す物だ。　オドオドと進む。

歩き方もあえて下品にカツカツと、靴の音を立てて進んだ。

「ハッハ。　怯えておられますな　公子様は。

これから太子になられるお方がそれでは、いけませぬなぁ。」

脇にいるビチグソ女……☒政の母親のあの毒々しい女の反対側にいる男がそう呟いた。

この恰幅の良さそうな男こそ、呂不韋であろう。

そう、今は、こいつに権力を与えやすい、無能な公子・☒政を演じなければならない。

下手に本性を剥き出しにしては、王にはなれまい。

まあ、尤も、ビチグソ女と体の関係がある以上、あのビチグソ女が呂不韋のアレ咥えて肉体で交渉してくれんだろ。

俺が王にならなければあの女も太后として後宮に君臨できないからだ。

あの女は、自らが受けた理不尽をそのまま☒政に押しつけた。

育児を放棄し、いたぶった。
俺の両親が弟ばかりかわいがり、俺を半ば育児放棄していた節があるのに結構似ている。
呂不韋から権力を奪い、失墜させたら、姦通罪で共々処刑してやる。
それまでの辛抱だ。

「ち、いえ、大王様、王妃様につかれましては、息災にて、政も安心致しました……。はい。」
怯えた風を装いながらも、王妃＝☒政の母親をキッと見据える。
ハハハ。　気味悪がっている。
貴様がそう成りはてたのは同情に値するが、それを☒政に向けた理不尽。
それを俺は許す気はない。
せいぜい王妃の座を楽しみやがれ　　売女が。
「き、気にせずとも良い。

邯鄲でさぞかし、辛い目に遭ったであろう。
私……余も邯鄲にいたから非常によく分かる。
殊にそちは子供であった。　難儀であったな。　政。」
☒政の親父は俺にそう向かって言ってきた。
声には親しみを感じる。
俺はふと、親父の顔を見た。
不健康気味で、顔色も悪いが、整った顔立ちをしていて、表情も柔和だった。
根が良い人で、そこを華陽夫人に気に入られたのだろうなと感じた。
「とっ、とんでもないことでございます。　父……大王様っ」
すると、親父は笑った後、
「相邦。（＝呂不韋）　政は疲れているようだ。
もう下がらせて、休ませるのが良いだろうな。」
「それがよろしゅうございましょうなぁ。」
「だ、そうだ。　もう下がるが良い。」
「は、はい。　し、失礼致します」
俺はまた、オドオドと退室していった。

「一体、アレは何の真似ですか　政様。」
昌文君が俺に尋ねてくる。
ちなみに、昌文君には、人前では政様と呼ばせることにしている。
そして、昌文君は明らかに不満げだ。
「ふむ。　そなたからそのような意見が得られるのであれば、及第点であろうな。」
「つまり、演技だと。」
「当たり前だろう　こう言っては悪いが、父上は長くない。
顔色の悪さを見れば明らかだ。
そうなると、次の王を擁立せねばならない。
ならば、よりやりやすい公子を選ぶだろう。
呂不韋を排除する前に、まずは俺が王にならねばな。」
「……流石、儂が見込んだだけはあるな。
見事だ。」
「ああ。　これからも俺に付いてこい。

そうすれば貴様を相国にしてやる。」
「ハッ！」
「だが、ひとまずは、この国の文字、地理、政治の仕組み、国際情勢を勉強せねばならぬ。
教師を手配してくれ。」
「お任せを」

そして、俺は翌日から、勉学に励むこととなる。

こうして、1年が過ぎたある日。
秦に最初の試練が訪れようとしていた。

第六話　魏公子の謀反

（ｓｉｄｅ　魏無忌）

「呉慶。」

「ハッ。」

「魏火龍の同士討ちに関して、貴君が調べた結果を委細話してはいただけまいか。」

「畏まりました。　原因は……」

私は、兄上から帰国を要請され、つい先年、大将軍の筆頭に任じられ、魏の軍権の全てを掌握した。

この、私の筆頭食客にして、軍師も務める呉慶も大将軍に返り咲いている。

この、私が魏を留守にしていた内に、魏の国内情勢は急激に変化してしまった。

「魏の伝家の宝刀」と謳われた名将揃いの晋一族の晋鄙将軍を、秦に亡命を図っていたとはいえ、王命に背くとうそぶいて殺して以降、魏には魏火龍七師……晋鄙将軍の副官であった太呂慈と紫伯を除く5人が私の食客出身ではあったが……と呼ばれる7人の大将軍が出た。

しかし、その大将軍のうち、呉慶を除く6名全員が1ヶ月の内に病死し、呉慶も邯鄲

にいた私を訪問してきた。
それ以降、魏国の国勢は更に衰えを見せて、やむなく私が呼び出されたと言う訳である。

しかし、この魏火龍七師の内、廉頗将軍との戦傷で亡くなったとされる太呂慈も含め、僅か1ヶ月で6人が亡くなるのはまさに異常事態である。
何かがあったとしか思えず、私は呉慶に事の顛末を改めて調べさせた。

「成る程。
紫太が、紫伯とその義妹の紫季歌の恋路を妨害し、太呂慈に紫季歌を嫁がせた。
妻殺しの太呂慈に紫季歌を殺された紫伯が、太呂慈、晶仙、馬統を殺した……か。
で、呉慶」
「ハッ。」
「何故、紫太は、太呂慈に紫季歌を嫁がせたのだ？」
「紫太の、実の子ではない紫伯への、死ぬ前の最後の当てつけであるとの見方も強いです

が、実はそうではありません。」
「……それだけではないとは?」
「こちらをご覧下さい。
私が、かつて魏を出奔するに至った、本当の理由はこちらになります。」
「?!　あ、兄上は何をやっておるのだ!?」
本当の理由。　それは、
「紫伯はかつて、大梁随一の美男子としてその名を馳せており、その容姿で大梁内の大勢の少女や貴婦人を虜にしておりました。
そしてその貴婦人達の中には大王の愛妾・如姫様も含まれており、それに嫉妬した大王が、紫伯への厭がらせを計画しました。
紫太に策はないかと尋ねたところ、紫伯を嫌っていた紫太は、紫季歌を太呂慈の元に嫁がせると言う暴挙に出たのです。
そして、紫伯が魏火龍の3人を殺したことに逆上した大王は、私と霊凰、凱孟の3人も同罪とし、逮捕しようとしました。
私は、息子の鳳明が幼かったので、邯鄲の貴方様の元に馳せ参じました。
私も大将軍に任じられたのは、貴方様の手前、魏火龍七師筆頭であった私を逮捕するのを憚られたからです。

そして、この文書は、その紫太と大王の往復書簡になります。」
間違いなく兄上の筆跡であり、魏王の印も捺されているし、紫太の筆跡も間違いないとのことで、このやりとりが実際にあったことは確かと言える。

何ということであろうか。
兄上が、半ば自身の下らない嫉妬の為に、功臣に厭がらせをした結果、功臣の暴走を制御出来ずに処断してしまうという愚挙を犯していたとは。
そして、その尻拭いを私にさせようとしているとは！

双六をしていた時もそうだった。
趙の狩りを侵攻と勘違いした兄上は私に縋り付いておきながら、結局狩りと分かると、私を遠ざけた。
晋鄙の時も、かつての段干崇の時よろしく、晋鄙が秦への亡命を図っていたことを証明しても尚、私の帰国を許さなかったかと思えば、此度のコレだ。
私は、兄上にとって、都合の良い道具でしかないのか?!

私は兄上にとっては弟ではなく、政敵とでも？
私が魏王の座を狙っているとでもお考えなのか?!

それだけならば、まだ仕方ないと思えた。
しかし、この度の魏火龍同士討ちの件に兄上が深く関わっていたとなれば、話は違う。
兄上は、国を損なった！
武人の功績に対し、厭がらせで応えた兄上は、魏国の武人の信義を、名誉を、忠義を踏みにじったのだ！
これ以上、兄上を王にしていては、魏国からは正義の光が消えてしまう。
魏の為に尽くす武人がいなくなってしまう。
そうなれば魏国は終わりだ。　兄上をこれ以上、王位に就かせていてはまた同じことが繰り返されてしまうだろう。
「呉慶っ！」
「ハッ！」
「兵を直ちに集めよ！　大梁中の侠客の方々もお呼びするのだ！
私は、魏無忌は、魏国の為に兄上を討つ！」

「ハッ！」
孟嘗君に憧れていたあの時の私には、もはや顔向けは出来ない。
義兄弟の契りを交わした春申君……黄歇殿にも、義兄の平原君・趙勝兄貴にさえも、顔向けは出来ない。

「目指すは魏圉の首、ただ一つ！
王として国家の剣たる魏火龍七師を処断した昏君を赦すな！」
軍は急造ではあったが、大梁の宮城に侵攻するや、近衛兵を撃破した。
「?!　何の真似だ！　無忌っ！」
「兄上。　いや、魏圉っ！
貴方が魏火龍七師にしたことを、武人の築き上げた名誉に傷をつけた貴様を私は許しはしないっ！」
兄上は食客の剣に倒れて死んだ。

「無忌様っ！　これは一体、何としたことですか?!」
「無忌様っ！」

群臣達は騒ぎ出す。

「よく、聞けっ！

魏火龍七師のうちの、呉慶を除く6人の死は、病死でも何でもない

魏王の、魏圉の下らない嫉妬による卑劣な、紫伯への厭がらせによる同士討ちに逆上した魏王が、魏火龍七師を処断したことである！

魏火龍七師という、国の英雄達を、自身の都合で仲違いさせ、徒に国の棟木を傷つけた、この昏君を私、魏無忌は、たとえ兄上であっても許すことは出来なかったのだ！

今日の、魏の国運が危殆に瀕した要因は、全て、魏圉が自身の都合で、勝手に功臣である魏火龍を仲違いさせ、処断したことにある！

故に私、魏無忌はここに宣言する。

昏君・魏圉の招いた、今日の魏の未曾有の国難の収集を収めるため、私、魏無忌は魏王に即位するつもりだ！

無論、これは放伐（簒奪）である事は承知している。

兄を殺したという不義に対し、私は、魏を立て直すことで償っていくことをここに誓う！」

私は、もはや引き返せない道を突き進むことを選んだ。

義侠の道とは異なる、人倫にもとる道だとしても、私は……。

そして、この報せは魏国全体を駆け巡った。

私は、即座に魏火龍・紫伯、凱孟、霊凰を解放し、呉慶共々大将軍に任じた。

侠客達の中には、当初、私の兄殺し不義に対し、私の元を離れていくものも多かったが、やがて魏火龍騒動の真相が広まっていくや、一定の理解を示す侠客達も出てきた。

そして、魏の国民が、この事態を歓迎したのは言うまでもなく、魏国全体にはこの数十年間、類を見ない程の団結が見られ、対秦征伐の気運は最高潮に達していた。

第七話　王騎と対面

（ｓｉｄｅ　足立政一＝⊠政）

「魏無忌が、信陵君が、兄王を殺した?!」

「は。　間違いありません。

魏王が魏火龍を処断していたことが露見しており、魏王の罪は明らかになっており、魏王以外は粛清されておりませんので、魏国内での混乱は全くと言ってよい程起きておりませぬ。

ただ、信陵君の食客が何人か彼の元を去った他は何も変わった出来事はない状態です。

それどころか、むしろ、魏国内の士気は最高潮に高まっているとのことです。」

信陵君はかつて、邯鄲を包囲していた六大将軍の王⊠を打ち破った程の軍略の持ち主らしい。

春申君や項燕の楚軍が邯鄲に到着した頃には王⊠は大敗していたというから、魏単独で王⊠の秦軍を打ち破ったことになるという。

まさに、中華の英傑。　戦国四君と呼ばれるに相応しい才能だが……それだけに

恐ろしい

しかも、王として立った今、もし仮に自ら秦に攻めてきても、離間策は使えず、撃退には労力を使うことになる。

「昌文君っ！」

「ハ……？」

「王騎に会いに行くぞ」

「ハ、ハハッ！」

チ……仕方ないが、予定を更に繰り上げて王騎に面会するとするか。

（ｓｉｄｅ　王騎）

ンフ……。　魏火龍がまさか生きていたとは……。

「騰も驚いたでしょオ？」

「ハ、殿におかれましては、まさに僥倖とも言えるかと」

「そうですねェ。

ですが、中華の中心は完全に魏王……魏無忌さんになってしまいました。

あの人はどこまでも真っ直ぐな人ですから、間違いなく秦に攻めてくるでしょう。

ンフフぅ。　面白い時代になってきましたねェ。」
「ハ、まさに。」
さてさて……。
？公さん風に言うなら、〝魏無忌さんはどれだけの大炎を、中華にまき散らしてくれる〟のでしょうか？

今から楽しみでなりません。

……おやおや。　来ましたか
私共々、あの華々しい時代の再到来を渇望してならないお馬鹿さんが。

（ｓｉｄｅ　足立政一＝☒政）
「感謝するぞ。　昌文君。」
「一重に王騎を説得出来るか否かはお主にかかっておるからな。
気にせんで良いわ」
昌文君は二人きりの時は、俺にため口で話す。

「そうか。　昌文君。
　お前も来い。
　まだ11才とあれば、1人では大言壮語を吐く恐れを知らぬ、無垢なガキと侮られる恐れもあるゆえな。」
「勿論だとも。」

「お入りなさァい。」
　王騎と覚しき、艶のある声が聞こえてくる。
「失礼するぞ　王騎」
「今日は私に何の用で……昌文君、あなたこの歳で子供とは随分良い趣味ですねェ。」
　はじめて見た王騎はたらこ唇で、どことなくオネェな気配を漂わせているが、圧倒的な気配を持ち、さながら山がそびえているかのような威圧感だ。
「ち、違うわっ！　　このお方は太子の☒政様だ。」
「☒政だ。　会えて嬉しく思うぞ」
「……おやおや。
　太子様がこの王騎にいったい何の御用ですか？」

「2回程、将軍に協力してもらいたいことがあります。」
何故か敬語調になってしまった。
まあ、完全に敬語とまではいかなかったが。
「お断りします。」
「……何故だ？」
理由は簡単だがここは敢えて……。
「ンフフ。決まっているでしょう？
たかだか10そこらの太子様。
貴方にこの王騎を使いこなすだけの力量があるとは思えないからですよォ」
「そこは無論、承知している。
お前が俺の力量を知るならば、わざわざこちらから出向かずとも馳せ参じよう。」
「ですよねェ。
まあ、わざわざ出向いていただいたのですから？
話だけはお聞きしましょうか。」
「まず、1つ目だが、将軍の私兵のうち、騰将軍、録鳴未将軍、干央将軍、隆国将軍をお貸し頂きたい。」
「……何に使われるおつもりですか？

私が手塩にかけて育てた兵達を？」
「魏無忌への備えだ。
王⊠大将軍達が洛（河南）の地に兵を構え、備えてはいるが魏無忌は王⊠大将軍を撃破し、必ず函谷関に至るだろう。」
「つまり、魏無忌と戦ってほしいのだ。
王騎よ。」
「そして、将軍の私兵に受け持って頂きたいのはこの場所だ。
戦う軍は……俺の見立てが正しければおそらく楚だ。」
「この位置は……そうですか。
今すぐ首を縦には振れませんが、考えておきましょう」
「感謝する。　もう一つの件は、また後日。
俺が将軍の眼鏡に適うものに映った、その時にまた考えてほしい。
それでは失礼する。」
「……。」

そうして俺は王騎の元を去った。

「……さっき王騎に見せた図面は一体、何だったのだ？」
「あれは、俺なりに考えた魏無忌が秦に攻めてくる際の戦略だ。
あの作戦ならば、間違いなく秦は軍を咸陽に進められて滅亡するだろう。
今回の訪問はそれを補う刃として王騎の私兵を借り受けるのが一先ずの目標だったのだ。」
「それで、もう一つの案件とは？」
「……まだ時間がある。　今はまだ温めておく。」
「そうか……。」

そして、その1ヶ月後

魏王となった魏無忌が、楚・趙・燕・韓・衛と一気に同盟を締結するという事件が起きた。

第八話　来ちゃった魏無忌さん

（ｓｉｄｅ　足立政一＝☒政）

魏無忌が五カ国同盟を組んだ。

この報せを受け、秦の宮廷は既に大騒ぎとなっていた。

「楚との国境には、張唐将軍を派遣し、牽制に当たらせるべきだ！」

「魏・韓は王☒大将軍と蒙？将軍が既に洛に兵を構えているから、彼らに引き続き、見張らせよう。」

「趙は、馬陽に蒙武将軍を移動させました。」

「ふむ。それだけでは不安だな。？公将軍に友軍として、魏・韓・趙のどこから来ても対応出来るように待機させておくのが良いかと。」

「あ、ああ。　良きに計らうが良い　丞相。」

この一連の出来事は原作では無かったことだ。

おそらく、ここら辺は史実通りに動いているに違いない。

史実通りにいくなら、李斯が離間策を使って魏無忌を失脚させられるのだが、魏無忌が王となってしまった以上、失脚させるのは不可能。

かなり厳しい状況だ。
そして、親父は、そうした文官や呂不韋達との協議に忙殺されているようだった。
顔色も悪く、最近では姫妾との××も疎かとの噂もある。
そろそろかな。
×

「昌文君。」
「何じゃ。」
俺は昌文君と宮城の階段の途中の広場で、城下に広がる咸陽を眺めながら話していた。
「お前も私兵用意しとけよ。
戦は想像以上にもつれるぞ。」
「……無論じゃ。」
「３０００は欲しいが……難しいか」
「難しいわ！　出来るかっ！」
「そうか……。」
「……。」
太子ではやはり出来ることにも制限が出てくる。

そういう意味では一刻も早くあの親父には死んで貰いたいものだ。
早くタヒね。
「お主、今、何を考えていた？」
「……さぁな。」
昌文君は思いの外、鋭い男だった。

そして、更に二ヶ月後。
各地の間諜から伝令が届いた。
「魏・韓・趙・燕・楚が衛にて狩りを行っている」
との伝令である。
つまり、合従軍が興ったという事実上の宣言なのだ。
秦の宮廷は更なる大混乱に陥っており、親父は病に臥せることも多くなってきていた。
太子である俺はまだ参加出来ないのがもどかしかったところであるが、そろそろ参加させるべきでは無いかとの意見が徐々に朝廷内からも出始めていた。
咸陽の街もどことなく緊張に包まれている。

皆もやはり不安なのだろう。

そして更に半月後に、衝撃の報せが届く。

この日は、俺は病に臥せった親父に代わり、ようやくはじめて朝政を任された。

「それで、どうしたのだ？」

まあ大体は呂不韋が仕切ってくれる。

あと3年、いや、2年以内には倒したい奴だが、この場では頼もしい。

「は、はっ！

王⊠大将軍・蒙？将軍の部隊、合従軍と交戦し敗走。

函谷関にまで退却し、体勢を立て直す故、各地より兵を函谷関に集結させて欲しいとのことです！」

王⊠は言うまでも無く、キングダムにおける六大将軍、秦国随一の猛将である。　汗明には負けていたけど。

そして蒙？も間違いなく名将で、新六大将軍になるであろう桓騎や王翦といった副官も既に加入済であるから、間違いなくその軍は秦国でも無類の強さだ。

この報せに、文官の間に更なる緊張が走る。
「それで、戦の詳細を聞かせてくれ。」
「はっ！
まずは馬陽の蒙武将軍、亜水にいた？公将軍の部隊は交戦が予想された河台・鄭里盆地に軍を進めましたが、間に合わず、王☒大将軍と蒙？将軍の二軍のみで交戦状態に入りました。
王☒大将軍が魏に、蒙？将軍は燕に、副官の王翦将軍が趙軍に、桓騎将軍が韓軍に当たられ、楚は部隊を温存する形となりました。
まず崩れたのは王☒大将軍の部隊です。
凱孟軍を撃破し、紫伯の部隊も追い詰めていましたが、
どうやら凱孟・紫伯は囮であったようで、霊凰軍・乱美迫の部隊が渡河して王☒大将軍の部隊は壊滅状態になってしまったとのことです。
幸い、王☒大将軍は凱孟・紫伯に重傷を負わせ、味方の退却を援護致しましたため、どうにか無事とのこと。
また、蒙？将軍も崖上に作った堅砦が、不幸にも燕の部隊が山民族であったために破られ、また、廉頗将軍の別働隊にも脇腹をつかれ、かなりの被害が出た模様です。
それを受け、王翦・桓騎両将軍は撤退したとのこと。

これが戦の全貌です。」
文官は皆、あきらめかけていた。
表情から見て取れる。
目から生気が失われつつあった。
李牧によって起こされた原作の合従軍よりも、今の状況はかなり危機的だ。
まず、既に1回、味方が敗北しており、士気が挫かれている。
次に将の質が李牧のソレよりも遥かに高い。
敵は燕からは劇辛、オルド、趙からは廉頗、楚からは汗明、臨武君、魏は紫伯、凱孟、霊凰、そして魏王・魏無忌。
加えて未知数な韓将……喬立大将軍とは何者だろうか。
それに対して、味方は王☒、王翦、蒙?、桓騎。
蒙武、張唐、?公を足しても、やはり役者不足は否めない。
加えて、李牧の時の合従軍は侵攻の足並みを揃えるため、全速力とは言えない進軍速度であったが、既に合流済みの軍は既に足並みを揃える必要は無い。
大軍故に融通は利かないかも知れないが、その分進軍速度は李牧のソレよりも速い。
「……それで、王☒大将軍達の軍隊はどうなっておるのだ?」
「王☒大将軍・蒙?・将軍の部隊は合従軍の追撃を受けていますが、王翦将軍の巧みな殿軍

采配により、各地の城から兵を加えつつ、要所要所には城を固めさせた結果、些かの猶予が出来てはおります。」

丁度、劉邦の金蝉脱殻の計に似たような感じになっているのだ。

城を固めさせ、焼け石に水程度ではあるが、足止めを図らせ、足止めにならないような城は、兵を必要最低限だけ残して残りを全て回収する。

「ほう。　流石と言ったところではあるな。」

って、文官の大半は話聞いてないな。

何やってんだよ……全く。

「おい、貴様ら文官共っ！　何をしているっ！

呆然としている余裕があるというのかっ！」

つい、俺は叫んでしまう。

あの☒政のようだ。

ハッ！　っと文官共は一斉にこちらを見る。

呂不韋や李斯、昌平君までもがこちらを見た。

「今、この瞬間にも、国が滅びようとしている！

往年の楽毅が斉の☒王を攻めて臨淄を陥落させたように、貴様らは咸陽をむざむざ落とさせる気か？

国が滅びて俺の首が飛ぶだけで済むならば良い！
しかし、貴様らも無事では済まぬし、貴様らの家族さえも無事では済まぬだろう。
民達もそうだ。
上は死にかけた老人から、下は生まれたばかりの赤子まで、亡国という理不尽を味わうことになるし一生を希望を持てぬ世界で終えなくては成らなくなる！
貴様ら以外に、それを止める術を探せる輩がいると、思っているのかっ！」
まさに☒政やってるな……俺
「「は、ははっ！」」
文官共は我に返り、地図を運び出させたり、対応策を話し合う方向に動き出す。
「ふむ。　して、太子様。　どのような術をお考えか、この呂不韋にも教えてくださいませ」
突然、呂不韋が俺に向かって話しかけてきた。
一応、考えはあるが……あまりにも大胆すぎるので何故か呂不韋には話しづらかった。
が、話すことにした。
「まずは、士気をどうにかせねばならない。
味方は敗走し、士気が低下しているのに対し、敵は勝利で士気を更に高めた。

故に、士気を取り戻すため、俺は……。
父大王から、王位をこの瞬間にも、継承し、自ら函谷関に出撃する!!」